

幕内の生産技術

—『会津農書』にみる農業技術の変遷—

佐々木 長 生

はじめに

- 一 幕内の概況と生業形態
- 二 幕内の生活空間
- 三 幕内の生産空間
- 四 幕内の生産技術

- 五 『会津農書』にみる農業技術と伝承
結びにかえて

論文要旨

幕内は、会津若松市神指町にある五〇戸ほどの一集落である。江戸時代には、若松城下に野菜を供給する菜圃場として、畑作物栽培を中心とした近郊農村であった。貞享元年(一六八四)、この村の肝煎佐瀬与次右衛門は『会津農書』を著している。会津地方の農業を、旧慣習と体験・実験に基き体系化した農業技術書である。与次右衛門は、その内容を農民にもっとわかりやすくするために、『会津歌農書』・『会津農書附録』を著述した。これらの教えは、養子林右衛門に継承されてきた。林右衛門は、正徳三年(一七一三)に『幕之内農業記』を著す。特に、畑作物の栽培技術を詳しく記述している。当時の農民にとって、まさに作業マニュアル的なものである。

幕内は、昭和一九年の小野武雄編『会津農書』の発刊以後、歴史・経済・農業の各分野の研究において注目の村となつた。藤田五郎氏の豪農に関する一連の研究は、その中心的存在であった。これらの研究史料となつたのが、与次右衛門の『会津幕之内誌』・林右衛門の『佐瀬家記録』であった。以来、幕内の研究については、『会津農書』の研究の一端として関わる程度で、村を中心とするものはなかつた。

本稿では、幕内の民俗調査から村の生活をとらえ、その地域性をみようとするものである。特に、菜圃場という商品作物栽培の村の生産技術における民俗の変遷を明らかにすることを目的とする。その方法として、『会津農書』に記述されている農業技術が、幕内の農業にどう生かされているか、その照合を行つた。その結果、農家の屋敷取り・家屋の造り方・作物栽培技術・農耕儀礼など、『会津農書』の技術が近年まで継承されてきていることが、史料・伝承および農具の変遷などから知ることができる。

『会津農書』という偉大なる農書の教えが、菜圃場としての幕内の農業に生き続け、それは今日の農業にも生かされてきている。『会津農書』の村・幕内という意識が、村人から強く感じられる。それが、「幕内の茄子苗」に象徴されている。